

1970年代、私が未だ二十代だった頃、銀幕の世界はフランス映画に席捲されていた。そんな映画の一場で当時特に美男を以て鳴った俳優アラン・ドロロンが観客の注意を引いた仕種がある。彼はタバコを抜き出すと、それを横に持って鼻の下にあてがい、恰も匂いを嗅ぐようにしてから火を付けるのである。何故そうするのか、映画の中の役回りとどう絡むのだろう。訳も分からぬままファンは興味をかき立てられ、高が一本のタバコでドロロンの魅力はいや増した。タバコが動くアクセサリー等と持て囃された時代である。どう逆立ちしてもドロロンのような美男にはなれない。しかし、まねる事は出来る。簡単だ。タバコを鼻に当てて、吸えば良い。猿真似の代償が如何に大きなものか、その時は露も知らず、私はいい気になってタバコを吸い出し、直ぐヘビースモーカーになった。当時は何処で何時タバコを吞もうと誰も文句を言わない。今日も元気だ、タバコがうまい。私は日に三箱も吸っていた。一年もすると、しかし、猿真似の罰が先ず鼻炎となって現れた。鼻腔が干上がり、時に血が滲む。耳鼻科の診断では肥厚性鼻炎とのことだった。私は鼻にチューブを差し込まれて何か蒸気を通される治療に入った。暫く続いたが余り効果はない。タバコは吸い続けていた。子供の頃丈夫だった私は風邪をひき易くなり、ひくと直ぐ気管をやられた。酷い時は金属的な甲高い咳が肺を突き破る様に出て、止まらない。胸が軋んで痛かった。気管支拡張症に罹っていたのである。その時ばかりは私も流石にタバコを止めた。しかし、完全な禁煙には至らない。口許が淋しくてガムを噛み過ぎ、治療した歯の被せ物が取れてしまう有様だった。結局、禁煙には失敗した。タバコの魔力は巧妙で、それは様々な時に色々と姿を変えて迫ってくる。その魔手に屈して、私は紫煙をくゆらす愛煙家として人後に落ちない等と嘯っていた。その頃、疲れた時なぞ煙を吸い込むと胃に鋭い痛みが走る事もあった。私はさほど気にもしなかったが、胃潰瘍になっていたのだ。後年、成人病の検査を受けて初めてそれを指摘され、自然治癒の癍痕を示されて我ながら啞然とした。しかし、ニコチンの体に及ぼす悪影響の中でも最も私を苦しめたのは痔疾である。二十代の半ば、私は悩んだ末に或る総合病院に一日程入院して手術を受けた。担当医の話では病気は痔ではなく毛穴から侵入した細菌による「毛膿瘍」であるとの診断だった。しかし、術後も経過は捗々しくない。相変わらず出血して時に針を差し込まれるような苦痛に苛まれた。二年後、今度

は専門病院で痔瘻と診断された。元来は結核とか梅毒とかの忌まわしい病に起因するものだが私の場合は雑菌によるとの事だった。当時、タバコが毛細管の働きを阻害する事等に言及はされなかった。再手術の後もやはり根治した感じがしない。私はタバコの害悪を深く認識する事もなく、相変わらず喫煙を続けた。結婚して娘に恵まれ、更に息子も授かり、三十四才になった頃だった。愈々体は変調を来していた。いつも全身がだるく、息苦しい。当然、常に不機嫌で苛々している。怏々として人生を楽しまない私に妻は呆れ、愛想を尽かしかけていた。それは私という人間の性格と体質の所為だと思われていたからである。四才になる娘がそんな私を密かに見つめていた。朝、朝食代わりに珈琲を飲み、立て続けにタバコを吸って私は公団アパートの家を出る。近くのバス停に足を運ぶのも億劫な気分だ。バスを待つ欠伸する人が羨ましかった。私は夜も良く眠れず、欠伸はおろか、呼吸そのものが苦しいのだ。電話で仕事の話をしようとして息の継げない事さえあった。そんな或る日、私は体の半分が冷えて痺れた様で動けなくなった。病院に入ると直ぐ胸の X 線を撮られた。結果は片肺が潰れていたのだ。自然気胸に因るものだった。両肺とも潰れていたら命はなかったね。医者は私に禁煙を厳命した。タバコか命か、どちらを取るのだ、君、、、。タバコを本当にやめて暫くすると私はみるみる健康を取り戻した。食事がおいしい。よく眠れる。体重が増えて、それをセーブする為に運動も始めた。するとどうだ。ジョギング中に嗅ぐ木々の緑が芳しい。胸に取り込む空気が新鮮な生の息吹そのものと化して全身に満ちていく。私は生き物としての自分の体に快さを覚えた。気力も充実して、自信も蘇った。それまで仕事上の些細な問題も針小棒大に悲観されて却って処理を誤ったりしていた。しかし、今はどんな問題も敢然と受けて立つ事が出来る。私は文字通り自分が生まれ変わった気がした。何より嬉しかったのは元気になった私を見て娘の言った言葉である。「パパって、この頃、変わったのね。」幼い笑顔が私の目一杯に溢れた。禁煙して初めて私は健康ばかりかこの世で最も掛け替えの無いものを取り戻したのだった。